

直ぐなる静観〜森重香代子の歌〜

百留ななみ

ありがたく無二の縁である。筆者は森重香代子とめぐり近い、はじめて短歌を作った。七十年近い歌歴をもつ森重だが歌集は『末紫』(一九八二年)と『二生』(一九九八年)の二冊のみである。『末紫』は昭和十一年生まれの作者が二十七歳から四十五歳までの作品。結婚、子育てと家庭生活を送りつつストイックで静謐な歌が続く。三十代半ば(り)となりつつ以降の寂しい自己を冷静に詠った作品は読む者の胸にせまり、自己沈潜の微光を放つ。『二生』は十五年間の单身生活の後、作家・古川薫との再婚後の作品が大概。愛される充足感に満ちた開放的な心躍る歌も多いが、作者の抑制された距離感には存在をありのままに静観する揺るがぬ軸を感じる。作家の妻という新しい環境において、透明な直ぐなる視線はより自在になってゆく。

十首の愛唱歌

桃の枝に干したる足袋を夕べ来てむらさき
あかねの空より降ろす 『末紫』
すこしづつ済みゆく生ぞ瓦斯の火にしづか
にいまは鯛を焼きて

四十歳のわが暗濁のおもしろさみどりの蘭
の蜜をば舐むる

桃の枝に干された白き足袋をむらさきあかねの夕映えの空からゆつくり降ろす。洗濯物を取り入れる光景が艶やかな映像となる一首。「すこしづつ済みゆく生」を案じつつも「いまは」肯っているようだが、歌集のすぐ後の歌は「ゆくりなく見しより沁みて吾は見つ鏡の中の裸婦なる吾を」である。真直ぐに静観する自身の裸体。瓦斯の炎よりリアルで生々しい。二首の表現はかなり異なるが観点は同じであろう。「みどりの蘭の蜜をば舐むる」という円熟したそこはかとない色気に奇しくも四十歳の私は打ちのめされ、暗濁の奥深さを解らぬまま憧れたのである。

若からず近ひてかたみに桜に寄る一生はわれに二生のごとく 『二生』
ただいちど会ひてわかるる風が吹くわが衿
巻の毛をなびかせて
俺いまも少年さ、よく言ふと思へど五十五
歳わたくしだつて
東子もて磨きしのちをてのひらに撫でて葉

罐を洗ひをはりぬ

『二生』のタイトル由来のはなやかな桜の傍で半生を振り返った一首は、清新な決意を感じる。衿巻は作者自身、風にもある一期一会をごく自然に詠っている。愉しく開放的な作品は夫君の歌に多いが、「五十五歳わたくしだつて」の明るい声が聞こえる口語の作品。ただ薬罐を洗うことをこのように詠いあげるのは丁寧な生活、そして時間をかけての静観の美学であろう。

秋の陽に塗れながらに石の径われをみちびく
浅黄斑蝶は
「コスモス」2017・2

七日経し雨の夜を来てわが肩に止まりし羽
虫夫にあらぬか
2018・8

撓むまで伸びし庭草に陽は差せりこの寂し
さを人訪ふなかれ
2024・3

耽美的ながら強い覚悟を感じる「塗れながら」、浅黄斑蝶に導かれ作者はどこに行くのだろうか。暴雨のなかの葬儀、作者の肩の羽虫は端午の節句に逝かれた夫君。好一对の蝶と羽虫。そして再びの単身の生活。伸びた庭草に差す陽のひかりは、愛おしき微光である。悦びも哀しみも嘘のない真情であるから、その抒情は読者の心を捉え離さない。

森重は『末紫』の選歌を依頼した田谷鋭の思い出を「コスモス」(2014・3)に「返されて来た田谷氏の選歌は厳しく、恐ろしく、調子付いた歌には一切〇印が附されていなかった。氏の選によって、早い時期に、作歌の姿勢を正された、と記している」と記している。森重のその後の作品にも

田谷鋭の影響は大きかったのではないかと思う。

湯浴みの歌

八十八歳の今も森重の静謐な美しさはそのままである。湯浴みという個人的なことを詠んだ作品が『末紫』には十首あるが、すべて再びの独りの生活での作品。『二生』には再婚以前の三首のみ。最近の「コスモス」には湯浴みの歌を再見する。作者にとつて湯浴みは、自己を静かに見つめ生まれ変わる場であるのだろう。

ゆあみする泉の底の小百合二十の夏をう
つくしと見ぬ
鳳晶子『みだれ髪』

貝などのこぼれしごとく我が足の爪の光れ
る昼の湯の底
岡本かの子『かるさねたみ』

明治生まれの鳳晶子と岡本かの子の湯浴みの作品。いずれも二十歳過ぎの激しい恋の最中で、女性として肉体的にも瑞々しく美しく、自己陶醉をも感じると、高野公彦は『わが心の歌』に「あたたかい湯に浸っていると、確かに母胎回帰しているかのような至福を感じることがある」と述べている。森重の湯浴みの歌は概ね中年期の嫠婦としての心象風景。あたたかな湯の中だからこそ厳しい現実を確と受け止め、自己を静観することができる。大正昭和の時代の女性にとつての入浴は、身体も心も温かな湯に包まれる数少ない自らを解き放つ時間であったのではないか。

栓を抜き湯槽にをれりわたくしに直添ひに
つつ湯の減りてゆく
『末紫』

栓を抜き減りゆく湯槽の中の不思議な感覚。それを正直に言葉にするのは作者の個性かもしれない。直添いて、作者と湯が混じり合い、湯とともに流れ去りそうな「わたくし」だが、身体も心もさっぱりと濯がれ再生する。

みそぐごと湯浴むならねど浴場のそとひし

ひしと雪ふりゐたれ 安永路子『草炎』

雪明る昼の湯槽（ぶね）にかざりなく気泡をまどふ

わが肉（し）むらや 末紫

透明な研ぎ澄まされた禁欲的な文体の安永路子にも湯浴みの歌がある。森重よりも年長の大正九年生。自己を晒さない端正な作品のなか、ひしひしと雪ふる日の湯浴みの歌。人の心解く温かい湯は襖でもある。冷たく白い雪でより清浄な一首。安永路子の無欲ではないストイックな寂しさは森重の歌風にも影響を与えているのではないか。四十代となった森重の雪の日の湯浴みは、自身の肉体と気泡を直ぐに面白がつて静観している。雪明かりの真昼の一番風呂の清らかな温もりに心境の余裕をも感じる。

湯上りの裸婦にてあゆむ風圧に昼の硝子窓（ど）

かすかに震ふ 末紫

ゆあがりのみじまひなりて姿見に笑みし

昨日（きのふ）の無きにしもあらず 鳳晶子『みだれ髪』

浴室のくもる硝子戸わが裡に生温かき溷濁（こたたく）

すすむ 安永路子『魚愁』

「湯上りの裸婦にてあゆむ風圧」とは驚くほど大胆かつ自在だ。裸婦の言葉は前述の歌にもあったが、実に堂々として

いる。官能的ではあるがそれを上回る自己肯定そして矜持がある。清々しく一步を踏み出すエネルギーは硝子窓そして読者をも震わせる。『みだれ髪』の晶子の姿見に微笑むようなナルシズムは若々しく屈託がない。浴室の曇り硝子戸のなかで解放され入り乱れる安永の心の裡。溷濁に身を委ねるこの作品は、「四十歳のわが暗濁のおもしろさみどりの蘭の蜜をば舐むる」の精神にも繋がっているのではないか。暗濁を面白がり乗り越えた森重の自負ゆえの湯上りの裸婦だろう。

十年を経たるゆとりの寂しさびし昼の湯槽（ぶね）

に暝る一嫠婦 末紫

このごろのなやみ癒えしと思はなくに心平

らぎ昼の湯にをり 三ヶ島霞子『三ヶ島霞子全歌集』

嫠婦となつて十年を顧みるころには「ゆとりの寂しさびし」と直情を詠う。三ヶ島霞子は与謝野晶子の門下。明治、大正の時代の女性の生き辛さを歌に託す。非日常である昼の湯はひとり半生を静観できる時間。戦後の高度成長で物質的に豊かになった昭和の終わり。暗闇から微光が差し、作者も読者もおだしきひかりに包まれる。

嫁ぎ来てさまざまありし家去ると湯槽にひ

とり差しぐむわれは 三生

湯浴みより出でてすなはち乾きゆく人体と

いふ余熱の石は 安永路子『讃歌』

再婚を決意したあとの一首。結婚は家同士のつながりであった時代のさまざまなこと。主なきあとも蕭々とした嫁としての半生。安永の寂しさも慎ましやかな日々ゆえであろう。

取り残されたような寂しさはある。しかし人は生あるかぎり心に鉢に温もりを持ち、その熱で自らを乾かす。生きてゆくとはこういうことなのかもしれない。

早ばやと湯浴みし床に着きたしとひた思ふ

まで老いたりわれは 「コスモス」2023・8

「コスモス」の最近の湯浴みの歌。自分の老いがあるがまに詠っている。ふたたびのひとりの生活で、米寿の日々を達観した歌である。老境になっても自らを静観する歌は穏やかにまたストレートに読者の心にとどく。

小さき生

目立たないが小さき生きものに人間としての生、つまり作者自身を重ねた妙なる歌。習熟した感受性が静観する平易な言葉の歌は、歌集の基底を温かく照らす作品となり、森重香代子の歌世界をより豊かなものにしていく。

瓦踏む猫の足音ひそやかに伝はりくれば面おもて

上げて聴く 「二生」

きみは猫や蝶なに化る夢を見るや 闇に声する春のあけぼの

ダリの絵の女の肌よすに息やすみるし蝶あらはれて秋の径往く

わが庭の麵麴こむぎ屑くずにくるすずめらも生きかはるべし朝朝あさあさに眺ながむ

家猫のあやめし雀を土に埋めとなりなりに萌ゆる路の臺つむ

甃石にもつるる翳もきはやかに蝶二頭ある
夫の病む庭 「コスモス」2017・2

「瓦踏む猫の足音」は『二生』の巻頭の一首。静謐である作者の聴覚は敏感だ。ひそやかな生の音を聴く喜び。大胆な破調の歌だが「春のあけぼの」は読者をも幸せにする相聞。作者が闇に聞く、猫や蝶に変化する夫君の声。シユルレアリスムのダリの絵の蝶。夢や心の奥の欲望は現実となりその蝶はあるがまま秋の径を往く。ごく自然なること。麵麴屑にやってくる雀子は人の目には同じに見えるが、日々生きかわっているのかもしれない。人間の一生も生の鎖のひとつに過ぎないと静かに傍観している。家猫、雀、路の臺、それを摘む作者も同じ生。輪廻である。甃石にもつるる二頭の蝶。むろん入院中の夫君と作者だろう。際やかな翳は儂くもその存在の確たる軌跡。

廢園に佇む妻の袖に蝶 古川薫

二〇一七年六月の夫君の一句。同年の「コスモス」二月号巻頭の「クラシック蝶」と題する作品への返句であろう。古川薫の未刊のエッセイに「老朽建物の改築でことし中庭は廃苑となる。フジバカマは引っこ抜かれ、蝶は針路を失って、日本海に流離の旅を続けるのだろう」とあり、最後は「夫の病む庭」もなくなり、歌人は僕がいなくなつてから「謎の蝶」にみちびかれて冬の旅に出る」と結ばれている。みちびかれた歌人の心魂はいまも幽明を徘徊する旅に出ているのかもしれない。端正でありながら直ぐなる自在さは、宮柊二を慕う森重香代子の歌の魅力である。